

実践報告

京都大学における英語教育改革

—英語ライティング・リスニングコースに焦点を当てて—

桂山 康司*, 高橋 幸**, 金丸 敏幸**, 笹尾 洋介**,
ティモシー スチュワート**, デビッド ダルスキー**,
田地野 彰**

要 旨

本稿は、平成 28 年度から施行した京都大学の教養・共通教育における英語の新カリキュラムの理念と目的を中心に、その実施体制を詳説したものである。新カリキュラムでは、これまでのカリキュラムを踏襲しつつ、その理念である「学術的教養」と「学術的言語技能」の習得をより意識した科目設計を行った。そこでは、一回生で英語リーディングおよび英語ライティング・リスニングの 2 科目を必修科目として提供し、主として二回生以上に新たに E 科目（英書講読、英語講義、英語技能）を設定することとした。本稿では、これらのうち英語ライティング・リスニングコースに焦点を当てて説明する。本コースでは、1 クラス約 20 名の編成を実現し、対面授業できめ細かな指導を実現する一方、オンラインによるリスニング課題を導入し、自律的に英語学習に取り組む仕組みを取り入れている。また、国際高等教育院附属国際学術言語教育センターの教員が中心となって授業担当の教員を支える運営チームを結成し、教員懇談会をはじめとする担当教員や学部との連携を重視した取り組みを展開している。

【キーワード】 教養・共通教育、英語カリキュラム、EAP、ライティング・リスニング

1. はじめに

京都大学（以下、本学）では、教養・共通教育としての英語のカリキュラム内容を一層充実させるため、平成 28 年度より全学的な協力体制のもと新カリキュラムの設定を行った。その背景には、本学の教育研究における国際化が強く要請されるという社会的な状況があり、さらに本学の教育課程において、「英語の教育」と「英語による教育」の両者を充実させることが喫緊の課題として迫っているという事情があった。「英語の教育」とは、本学学生の英語力の育成、すなわち「英語による教育」を受講するための英語力の習得を直接の目的とし、そのための外国語としての英語教育を示す。もう一つの「英語による教育」は英語によって実施される教養・共通教育科目や専門科目を受講する「英語で学ぶ」教育を指す（京都大学国際高等教育院、2014）。大学の国際化という観点からすると、今後は「英語による教育」の重要性が高まる一方で、それを受講し、教養・専門的な知識を修得するためには、十分な「英語の教育」によって相応の英語力を身につけることが求めら

*京都大学国際高等教育院

**京都大学国際高等教育院附属国際学術言語教育センター

れている。

本稿では、このような状況のもとに行われた本学の英語新カリキュラムの改革経緯について説明しつつ、新たに設定された一回生を対象とする「英語ライティング・リスニングコース」を中心としたカリキュラム内容の目的と実際の運用について報告する。本稿を通して、大学の教育理念に基づいたカリキュラムの設定過程と、それを可能とする運営体制の構築過程を明らかにすることで、広く日本の高等教育機関におけるカリキュラム開発の知見の共有を図ることを目的とする。

2. 新カリキュラム設定の背景

本学の教養・共通教育における英語教育の目的は、平成 18 年度に「学術研究に資する英語」、すなわち「学術目的の英語 (English for Academic Purposes: EAP)」として定められた (京都大学高等教育研究開発推進機構、2007)。それまでの英語カリキュラムでは、教養・共通教育での英語教育の目的を「一般目的の英語 (English for General Purposes; EGP)」としており、このことによって多くの問題が表面化していた。そこで、当時、英語カリキュラムを策定するにあたり、まず英語教育の目的について検討が行われた。「学術目的の英語」という英語カリキュラムの目的は、以下に掲げる大学の基本理念 (教育) を念頭に、「特定目的の英語 (English for Specific Purposes: ESP)」の理論 (Dudley-Evans & St John, 1998; Jordan, 1997) に基づいて決定された。

京都大学は、多様かつ調和のとれた教育体系のもと、対話を根幹として自学自習を促し、卓越した知の継承と創造的精神の涵養につとめる。

京都大学は、教養が豊かで人間性が高く責任を重んじ、地球社会の調和ある共存に寄与する、優れた研究者と高度の専門能力をもつ人材を育成する。

(「京都大学の基本理念」平成 13 年 12 月 4 日制定)

さらに、一、二回生を対象とした教養・共通教育では、「一般学術目的の英語 (English for General Academic Purposes: EGAP)」として学部や専門科目に限定されない学術英語を対象とし、三回生以上が受講する学部専門英語 (および大学院専門英語) では、より専門科目と結びついた「特定学術目的の英語 (English for Specific Academic Purposes: ESAP)」を対象とすることが定められた。これら二つは、それぞれが独立して存在するのではなく、両者の授業目標や内容を明確にすることで、有機的な連携を行うことが期待された (田地野、2004; 田地野・水光、2005)。

以来 10 年に渡って、本学では学術英語を英語教育の目的に掲げ、その目的に沿ったカリキュラムが実施されてきた。そのカリキュラムは、「学術的教養」と「学術的言語技能」を融合させた本学独自の内容となっており、一回生のクラス指定科目に始まり、二回生で選択必修科目を修めるものであった。具体的には、まず、一回生でクラス指定科目として、アカデミックリーディングとアカデミックライティングを受講する。つぎに、二回生で四技能 (リーディング、ライティング、リスニング、スピーキング) に該当する技能ごとのクラスに加え、海外留学を視野に入れた外部英語検定試験を念頭に置いたテストテイキングクラスなどの諸分野を選択肢として用意し、学生が希望するクラスを受講する形を取っていた。

しかし、学術英語のカリキュラムが定められて以降、世界や社会の変化によって大学を取り巻く環境が大きく変容し、本学においても、学生がより実践的に英語を学び、英語によって学ぶことが求められるようになった。このような要請を受け、平成 25 年度に新しく発足した国際高等教育院

の企画評価専門委員会のもとに「外国語教育検討ワーキング・グループ」が立ち上げられ、英語を始めとする外国語の教育についての再検討が行われた。そこでまとめられたワーキング・グループの報告書に基づいて、平成 27 年度に国際高等教育院と大学院人間・環境学研究科の英語教員とが中心となって、英語カリキュラムの再編についての議論が行われた。半年に及ぶ議論の後、平成 28 年度から実施される新カリキュラムが設定された。

新カリキュラムでは、従前の英語カリキュラムの理念を踏襲しつつ、学術的教養の涵養と学術的言語技能の習得をより明確に意識したコース設計が行われた。これまでのカリキュラムでは、たとえば、アカデミックリーディングのクラスにおいて英語論文を読み、その内容を英語でまとめるといった融合的な授業が行われるようになった結果、アカデミックライティングのクラスとの違いが分かりにくくなるという弊害も生じていた。そこで、新カリキュラムの英語リーディングのコースにおいては、学術的教養の涵養を前面に押し出すことで、おもに内容面での統一を図った。一方で、英語ライティング–リスニングのコースにおいては、後述するように、おもに学術的言語技能の習得の観点から、統一の達成目標を設定し、共通のシラバスに基づいた授業運営を図ることとした。

教育課程上の設計として、これら英語リーディングと英語ライティング–リスニングの二つのコースが一回生対象の必修科目として提供されることとなった。二回生以上には新たに E 科目（英書講読、英語講義、英語技能）を設定し、より個人の能力や興味・関心に合わせた選択ができるよう設計された。次節では、この新カリキュラムのうち、大きく改良された英語ライティング–リスニングのコースについて紹介する。

3. 新カリキュラムにおける英語ライティング–リスニング

平成 28 年度から実施された新カリキュラムでは、一、二回生をおもな対象とした教養・共通教育における英語教育を表 1 のように分類・整理している。一回生では、英語リーディングの授業と、英語ライティング–リスニングの授業をそれぞれ前・後期に一つずつ受講し（合計 4 科目）、二回生以降で E 科目（英語関連科目）として 2 科目受講する。

表 2 は一回生対象の英語リーディングおよび英語ライティング–リスニングのコースの概要を示している。旧カリキュラムにおける課題として、聴解力育成に焦点を当てた授業の必要性が明らかとなったため、これまでのライティングにリスニングを組み込んだコースを新設した。また、難易度や評価に対する不平等を解消し、単位の修得における質保証のため、学部による統一教科書を採用した。

表 3 は主として二回生以上を対象とする E 科目の概要を示したものである。E 科目は、E1、E2、E3 の三つの科目に分類される。それぞれ、英語テキストの講読を中心的な内容とする科目（E1）、英語を使用言語として実施される科目（E2）、英語技能の向上を目的とする科目（E3）である。E1 や E2 では、担当する教員の専門的知見に依拠した教養的内容を扱い、E3 では学術英語技能の

表 1 新カリキュラムの概要

一回生	主として二回生～
英語リーディング	E1（英書講読）
	E2（英語講義）
英語ライティング–リスニング	E3（英語技能）

表2 一回生対象の英語科目の概要（平成28年度）

	英語リーディング	英語ライティングーリスニング
目的	まとまった長さの英語文章の読解を通して、国際的に通用する教養を身につける	アカデミックライティングの知識や技能と英語講義の聴講に向けたリスニング能力を習得する
開講コマ数	学期 73 クラス	学期 148 クラス
クラスサイズ	約 40 名	約 20 名
教科書	学部ごとに指定	学部ごとに統一
授業担当者	前期と後期で教員は交替（一部継続あり）	前期と後期で教員は交替 どちらかが英語母語教員

表3 E科目の概要（平成29年度）

科目名	開講コマ数	内容
E1	学期 26 クラス	英語文献の講読を中心的な内容とする科目（英文学、英語圏の文化を教授する科目、あるいは学部が英語を用いて専門的内容を教授する科目）
E2	年間 100 クラス以上	英語を使用言語として実施される科目（原則として外国人教員が英語による授業を行う科目）＊一回生から受講可能
E3	学期 56 クラス	英語技能の向上を目的とする科目（英語を用いた討論、発表、英語講義の受講や理解などの学術英語技能の向上を目指す科目）

向上に向けた複数の技能を融合させた実践を行う。このような科目設計には、学生の個々のニーズに応じた英語学習の選択肢の拡大が意図されている。

4. 英語ライティングーリスニングコース

4.1 指導内容と評価

本学の一回生を対象とした英語ライティングーリスニングコースは、国際高等教育院内の附属国際学術言語教育センター（International Academic Research and Resource Center for Language Education: i-ARRC）に所属する教員が中心となって運営チームを組織し、その運営体制の下に各教員が個々のクラスを担当している。

当該コースには、学術英語技能に焦点を当てた全クラス共通の到達目標が設定されており、三つの指導内容（ライティング、リスニング、学術語彙）がシラバスに明記されている。表4は前期（英語ライティングーリスニングA）の到達目標を、表5は後期（英語ライティングーリスニングB）の到達目標をそれぞれ示している。それぞれの指導内容の評価割合は、表6に示すとおりであり、その内容と割合も学期によって異なるものとしている。この評価割合は、すべてのクラスで統一されている。

これら三つの指導内容のうち、ライティングには上記の表の項目以外の到達目標として、前期の授業（英語ライティングーリスニングA）においては300語から500語程度の英語エッセイを書くことを、また、後期の授業（英語ライティングーリスニングB）では、1,000語から1,500語程度の英語レポートを書くことをそれぞれ設定している。ライティングの教科書は学部ごとに指定された洋書を使用している。それぞれの学期の内容に合わせて、同じシリーズの適切な段階のものを選

表 4 前期到達目標（英語ライティング-リスニング A）

ライティング	identify topic and supporting sentences of paragraphs. write a topic sentence. develop a paragraph with descriptive details. use some simple rhetorical styles. express ideas in coherent and ordered sentences. restate the main idea of a paragraph. write a single paragraph. express ideas in simple paragraphs. edit text under the guidance of the instructor. format written text appropriately and use suitable punctuation. write basic definitions and include these in a paragraph. paraphrase a variety of short texts, often using appropriate synonyms. retrieve information sources from the Internet.
リスニング	listen to and comprehend short academic passages. take notes from short presentations, lectures, or videos.
学術語彙	recall and use academic vocabulary.

表 5 後期到達目標（英語ライティング-リスニング B）

ライティング	develop an idea and write an essay outline. write an essay introduction that includes adequate topic background and a clear thesis statement. support ideas with outside source materials, sometimes provided by the instructor. select main points and some supporting details from news sources or academic texts. reproduce main ideas and some supporting details from news sources or academic texts. paraphrase texts using techniques to avoid plagiarism. summarize using strategies to avoid plagiarism. cite information sources at a basic level (e.g., use of author's last name and year). create a basic reference list for the works cited.
リスニング	listen to and comprehend longer academic passages.
学術語彙	recall and use academic vocabulary.

表 6 成績評価基準

	ライティング	学術語彙	リスニング	TOEFL ITP
前期	60%	10%	30%	—
後期	50%	10%	20%	20%

択している。

ライティングの指導では、学期ごとに教員によるフィードバックを 3 回程度実施している。クラス定員の人数を 1 クラスあたり約 20 名としたことで、教員によるきめ細かな添削指導を実現している。ライティングの評価は全体評価のうち 60%（前期）または 50%（後期）を占める（表 6 参照）。

リスニングについては、学生が GORILLA（Global Online Resources for International Language Learning Assistance）と呼ばれるオンライン語学学習支援システムを用いて、個別に授業外での学習を行う。3 週間分の学習ごとに、月に一度程度の割合で授業中に確認テストを実施し、合計 4 回のテストの点数を成績評価に反映することで、リスニングの教育効果を確保することとした。リス

ニング学習における学生、授業担当教員およびi-ARRCの運営チームの関わりとリスニング学習の流れを図1に示す。

学生は毎週、リスニングの学習を行うが、学習が完了していない場合には、運営チームからシステムを通じてリマインダを受け取る。また、テスト実施のタイミングで、運営チームから授業担当教員へ担当クラスの学生の学習状況が送付され、それに基づいた指導を行っている。リスニング課題1回あたりの学習期間は1週間に設定されており、締め切りを過ぎるとその回の課題は未完了として扱われる。全13回の課題のうち、8回以上課題を完了していることを単位認定の条件としているため、完了課題数が7回を下回った場合、ライティングと学術語彙の評価に関係なく当該

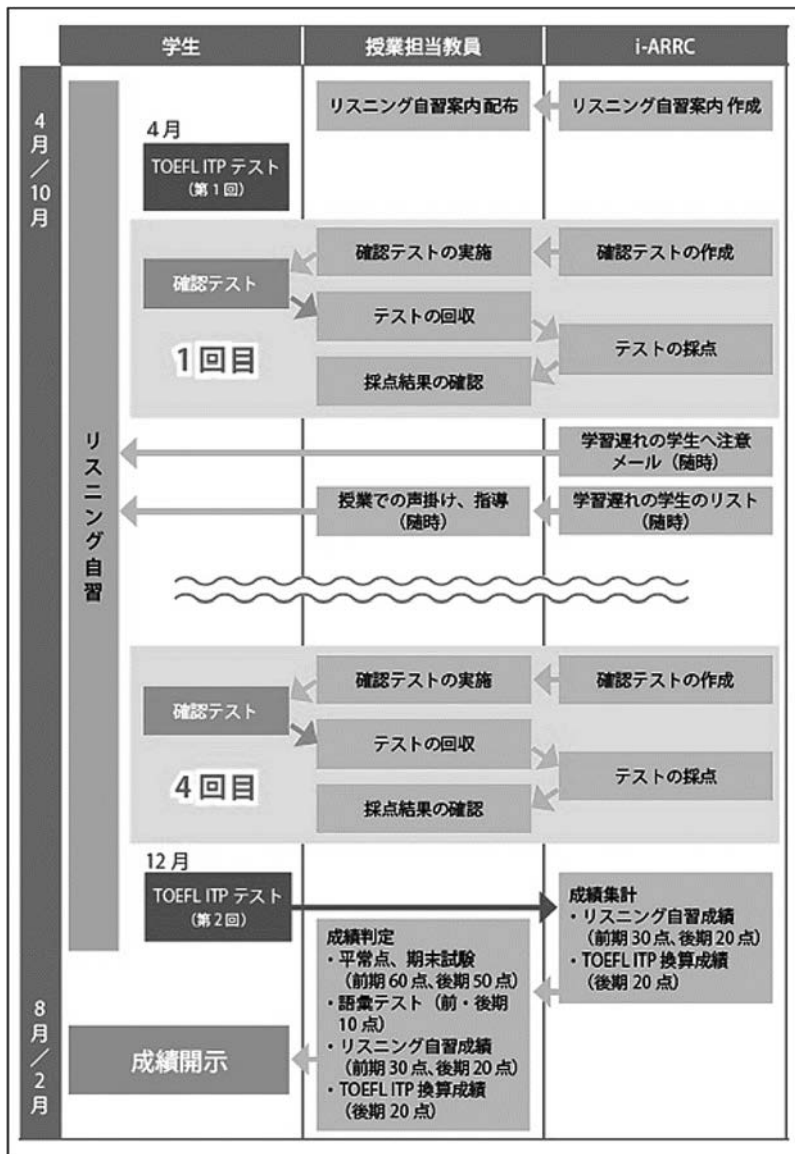


図1 リスニング学習の流れ

科目の成績が0点として扱われる。なお、リスニングは全体評価のうち30%（前期）または20%（後期）を占める（表6参照）。

さらに、一回生の4月と12月には、TOEFL ITP®の試験を実施し、学生が自らの学術英語運用能力をそのスコアを目安として知ることができるように配慮するとともに、12月実施のTOEFL ITP®の成績を、「英語ライティング・リスニングB」の成績評価に20%反映させることによって、学生が英語学習と英語技能の習得に取り組む動機づけとなるよう配慮している（表6参照）。

学術語彙については、共通教科書として『京大・学術語彙データベース基本英単語1110』（研究社）を使用し、各学期を通じて「文系・理系共通語彙」の477語を対象に学習させる。学習状況は授業中の小テストにより確認し、語彙知識の定着に努めている。学術語彙の学習については全体評価のうち10%を占める（表6参照）。

4.2 授業担当教員・学部との連携

教育の質保証に向けた取り組みとして、授業担当教員、学部および運営チームの間で緊密な連携が図られている。その関係を図2に示す。

まず、授業担当教員の間の連携を図るため、FD（Faculty Development）の一環として全授業担当教員が参加する懇談会を各学期末に開催し、指導法や授業における問題点の情報共有および改善案の検討を行っている。教科書は全学部あわせて3種類のため、各教員が実践している指導法や

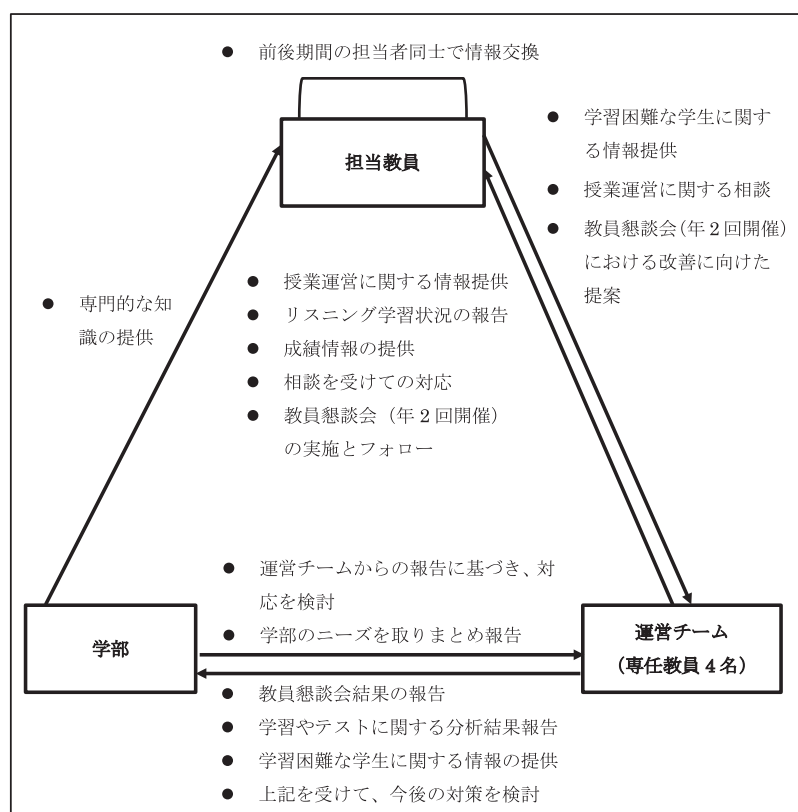


図2 担当教員・学部との連携

教科書の活用方法などについては、とくに具体的な議論が活発になされている。平成 29 年度前期の懇談会は、平成 29 年 7 月 31 日（月）から 8 月 4 日（金）まで、昼休みおよび 5 時限目内（16 時 30 分から 17 時 30 分まで）に開催され、専任教員と非常勤講師をあわせて延べ 69 名が参加した。教員の参加率は、i-ARRC 専任教員は 100%、非常勤講師も 90.5% と非常に高いものであった。

授業担当教員の配置に関して、英語を母語とする教員と日本語を母語とする教員がチームを組み、前期と後期でそれぞれが担当するクラスを入れ替え、英語と日本語を母語とするそれぞれの教員が持つ利点を効果的に活用できるよう配慮した。この体制により、すべての学生が一回生のうちに必ず英語母語話者による授業を受講することになった。

学部との連携として、各学術領域の専門家の観点から、各学部の統一教科書を推薦してもらっている。また、上述の懇談会の議論の結果を、運営チームが取りまとめて学部へ報告を行っている。さらに、リスニング課題の学習状況や授業への出席状況を集計し、学習に困難を抱えていると見られる学生に関する情報の共有および対応を行っている。

4.3 学習サポート

リスニングの授業外学習には毎週の締め切りがあり、計画的な学習が必要であるため、実施にあたっては、さまざまな学生向けの学習サポートを行っている。まず、学習内容については、リスニングのオフィスアワーを設け、運営チームの教員が火曜日から木曜日の昼休みを含めた時間（12 時 30 分から 14 時まで）に学習相談室に待機し、学生が予約なしにリスニング学習に関する相談ができる仕組みを準備している。また、学習状況については、定期的に授業担当教員に学生の学習状況を知らせることで、学習が芳しくない学生に対し、授業担当教員が個別に声掛けを行う体制を取っている。前述のとおり、授業の出席状況を含めて大学での学習に困難を感じている学生がいれば、授業担当教員から運営チームへメールで相談してもらい、運営チームが学部と連携して対応を行って、さらに、締め切りの前日にリスニング課題が完了していない学生に対しては、システムからのメールを通してリマインダを送り、定期的な学習を促している。

4.4 上級クラスの開設

英語ライティング・リスニングコースにおいては、より高度な英語運用能力を身につけたい学生を対象に、平成 29 年度より各学期に上級クラスを 2 クラス開講している。このクラスでは、英語を母語とする教員が、より発展的な内容を扱っている。成績評価については、表 4 および表 5 に示した到達目標と表 6 の成績評価基準が適用され、学期中にリスニングの確認テストも実施されるが、リスニング課題の完了課題数に関する単位認定の条件（全 13 回の課題のうち、8 回以上課題の完了する必要がある）が免除されている。

本コースは履修に際し、相応の英語運用能力を必要とするため、履修条件として、次の三つの条件のいずれかを満たすことを求めている。一つ目は、TOEFL iBT® のスコアが 80 以上（満点：120）もしくは IELTS のスコアが 6.0 以上（満点：9.0）であること。二つ目は、本学入学までに英語を日常的に使用する環境で教育を受けた者のうち、国際高等教育院で実施する資格審査に合格すること。三つ目は、一回生の 4 月に受験した TOEFL ITP® において、600 以上（満点：677）のスコアであること（本条件は後期のみ適用される）。平成 29 年度の前期は、2 クラスで 32 名の学生が受講した。

4.5 新カリキュラム導入の効果

一般的に、日本人大学生の英語運用能力は、受験勉強を終えた入学時をピークにして下がる傾向があると言われている。実際、本学学生を対象とした定量的な調査においても、語彙量については入学時が最も大きく、次第に減少していくという結果となっていた (Okamoto, 2005)。しかしながら、新カリキュラム実施の初年度である平成 28 年度の一回生の TOEFL ITP® のスコア平均を 4 月の入学時点と 12 月で比較したところ統計的に有意な上昇が見られた (分析対象：両方受験した 2,681 名)。また、それまでの複数年にわたる継続的なスコアの結果からも学生の英語力に変化の様子が確認された。TOEFL ITP® は、英語運用能力のうち特定の側面しか測定していないため、早急な結論を下すことはできないものの、これまで述べてきた一連のカリキュラム改革が今回の平均スコアの上昇に複合的な影響を与えたものと推察できる。

5. おわりに

本稿では、本学の教養・共通教育における英語カリキュラムの再編について、その歴史的経緯に始まり、具体的な実施の概要について述べた。旧カリキュラムでは、ESP の観点から本学の英語教育の目的を EAP に掲げて英語教育に取り組んできたが、国際高等教育院と英語担当教員との間で議論を重ねることにより、新しい英語カリキュラムを設定し、社会や世界の潮流に合わせた、より実践的な英語の指導が実施できる体制を確立することができた。平成 28 年度から実施された新カリキュラムでは、一回生を対象とした授業が英語リーディングと英語ライティング・リスニングに大別され、主として二回生以上を対象とした E 科目 (英書講読、英語講義、英語技能) が開設された。本稿では、英語ライティング・リスニングにおもに焦点を当てて説明したが、このコースでは、全学部約 3,000 名の一回生を抱えながらも、1 クラスあたり約 20 名のクラス編成を実現するだけでなく、統一シラバスと統一評価を導入し、その実施を可能とする体制を作り上げることに成功した。授業においては、教員によるライティングの課題に対するフィードバックを学期あたり 3 回程度実施するなど、きめ細かな指導も可能になり、また、前期と後期で日本語母語話者の教員と英語母語話者の教員を交替するという仕組みを導入し、授業そのものを通じて英語に触れる機会を多く提供することが可能となった。また、リスニングの授業外学習を導入し、毎週の課題を課すことによって、学生の自律的な学習を推進し、英語力の強化と学習習慣の確立の両方を目指している。これらを支える仕組みとして、教員による懇談会をはじめとして運営チームと授業担当教員に学部を加えた三者の連携を重視した取り組みを展開している。学習に困難を覚える学生から、より高度な英語技能を身に着けたい学生まで、幅広い学習ニーズを満たすため、新しい取り組みも展開を始めている。今後の本学独自の教材開発も含め、より教育効果の高い授業運営ができるよう、新カリキュラムの下で更なる検討を重ねている。

参考文献

- Dudley-Evans, T., & St John, M. (1998). *Developments in ESP: A multi-disciplinary approach*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Jordan, R. R. (1997). *English for academic purposes: A guide and resource book for teachers*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 京都大学高等教育研究開発推進機構. (2007). 『外国語教育の再構造化—自律学習型 CALL と国際的人

材養成一』，平成 15 年度採択特色 GP 報告書。

京都大学国際高等教育院. (2014). 『国際的な人材養成と外国語教育の改善（最終報告）』，国際高等教育院企画評価専門委員会外国語教育検討ワーキング・グループ最終報告書。

Okamoto, M. (2005). *University students' lexical acquisition and attrition in English in a foreign language*. Unpublished MA Thesis. Kyoto University.

田地野彰. (2004). 「日本における大学英語教育の目的と目標について—ESP 研究からの示唆—」. *MM News*, 7, 11–21.

田地野彰・水光雅則. (2005). 「大学英語教育への提言—カリキュラム開発へのシステムアプローチ—」
竹蓋幸生・水光雅則（編）『これからの大学英語教育』（pp. 1–46），東京：岩波書店。

English Education Reform at Kyoto University: A Focus on the English Writing-Listening Course

Kohji Katsurayama, Sachi Takahashi, Toshiyuki Kanamaru, Yosuke Sasao,
Timothy Stewart, David Dalsky, Akira Tajino

Abstract

This paper describes the philosophy, purpose, and implementation of the new English curriculum in the Liberal Arts and General Education at Kyoto University in 2016. The new curriculum draws on the philosophy of the previous curriculum, but puts more emphasis on a course design that promotes the acquisition of “academic culture” and “academic language skills.” It offers the two compulsory courses of reading and writing-listening for the first-year students, as well as “E” classes (English literature etc., lectures in English, and English skills) designed for second-year students and above. This paper focuses on the writing-listening course for all first-year students. The number of students in each section of this course is limited to about 20 students, allowing for high-quality learner-centered instruction. The course also includes on-line listening tasks which aim to foster autonomous learning. In addition, a management team is organized by faculty members of the International Academic Research and Resource Center for Language Education (i-ARRC) of the Institute for Liberal Arts and Sciences (ILAS), which holds teacher feedback meetings to enhance the collaboration between language teachers and content specialists.

Keywords: Liberal Arts and General Education, English Curriculum, English for Academic Purposes (EAP), Writing-Listening